

精神科医の蟻塚恭二氏は、福島原発事故で深いPTSDを負った人々との出会いと治療から、『悲しむことは生きること 原発事故とPTSD』を上梓している。「はじめに」に下記のように書いている。「ところで悲しむことは、悲しみを一緒に悲しんでくれる人がいて可能となる。心が凍り付いている時に、人は悲しんだり泣いたりすることができない。だから悲しむこと的前提には人間に対する信頼感がある。それは見えなかった未来が見えることである。だから『悲しむことは生きること』なのだ。」悲しむことができるのは、悲しみを共にしてくれる人がいるからで、人はそのような信頼関係の中で、悲しみを受け止め、未来に向け生きていけると言う。福島の震災は、地震・津波という「天災」と、原発事故という「人災」が複合した災害であった。「天災」はインフラが回復すれば、復旧したと見なされる。「人災」の場合は、加害者を認定し、被害者に謝罪し、賠償を行う。そのためには時間がかかり、被害者の精神的な負担は過重される。原発事故は避難を強い、生活の根拠を奪った災害で、未だ、加害者が認定されず、謝罪・賠償もされていない。

私は被災地を二度訪ねた。一度は、岩手、宮城、福島の3県の海岸を車で案内してもらった。津波の威力に圧倒された。中でも、石巻市の大川小学校で児童74名、教師10名が津波に飲まれた校庭に行った時、川を上って来た津波がここまで来るのかと驚愕した。校庭に設けられた祭壇で黙祷を捧げた。二度目は、日本基督教団の開拓伝道協議会で、原発被害の研修会があると聞き、参加した。色々な話を聞き、帰還困難地域とされた飯館村と浪江町に行き、無人になった町に放射能被害の深刻さを実感した。至る所に、汚染土を包んだ黒いフレコンが山積されていた。東京電力の対応に誠意がないという声が高かった。しかし、本書を読んで、私の理解・想像は薄っぺらなものであることを恥じた。

原発事故は、動けずに呻いている人に「明日、助けに来る」と言って、翌日は、放射線量が高いことが分かり、助けに行くことができず、亡くなったことから始まる。避難するために移動中、病人、高齢者は体力が持たず亡くなった。避難しても、除染してないから受け入れられないと排除された。その後の避難生活でも肉体的、精神的に負いきれないものを背負わされた。愛する家族を失うことは癒し難い悲しみで、住み慣れた故郷の喪失は、家、財産の喪失、親しい友人たちとの別れで、過去の一切を失う痛手である。自死者は二百を超えた。心のバランスが保てず、誰彼となく、怒りをぶつける。家族、隣人との温かな関係が結べなくなり、家庭不和、離婚、人間関係を壊す。性的に加害者・被害者になる。子どもたちは不登校、引きこもり、うつになる。数え上げれば切りがないほどの不幸に見舞われる。それだけでなく、PTSDが残る。強度の不安や恐怖に襲われた時、心に傷が堆積する。その傷は、ある機会に遭遇し、フラッシュバックする。蟻塚氏は、沖縄の病院で、沖縄戦のPTSDを負った人々の治療をしていたが、福島被災で同じPTSDを負った人と出会い、治療に当たられた。多くの例症を列挙しているが、その一例。北朝鮮のミサイルが発射されると、日本では「Jアラート」が鳴る。それを聞くと、被災時の恐怖が蘇り、体が固まり、涙が出て、口が利けなくなる。PTSDから癒されるのは、感情を押し殺さず、話し、泣き、怒ることで、『風と共に去りぬ』で語られるセリフ「Tomorrow is another day (明日があるさ)」という肯定的な未来への希望を持つことであると言う。

原発で「死者は一人もいなかった」と言った女性大臣がいたが、事実を無視する人で、国民のための政治家ではない。多くの人々が殺され、耐え難い苦悩を与えられたのに、原発を進める「原子カマフリア」に、本書を読んで考えをひっくり返してもらいたい。